

ハンセン病療養所における図書館の役割（上）

The Role of the Library in the Lepra-Sanatorium (1)

柴田隆行
Takayuki SHIBATA

はじめに

「古代ギリシアの都市テーベの図書館には“魂に薬を”という銘刻が掲げられていたし、2世紀には既に小アジアの古都パーガモンに患者用図書館があった。」

これは、菊池佑・菅原勲編『患者と図書館』の一節である。本書によれば、欧米では19世紀より病院患者図書館が本格的に始動しているが、わが国でその必要性を最初に唱えた論文は、医療専門雑誌『病院』1950年8月号と9月号に分載された村田弘「病院図書館試論」であるという。この論文はのちに、ハンセン病療養所長島愛生園の入所者が発行している月刊誌『愛生』の1952年10月号に「病院図書館のABC」という題で転載されている。村田はこの転載論文に新たに加えた序文で、「近頃あちらこちらの病院や療養所で図書館がつくられているが」と書いているが、病院患者図書館研究の第一人者として知られる菊池佑の調査によれば、1950年代はまだその存在自体が極めて稀であり、1974年でようやく全国全病院400のうち多少なりとも図書館サービスが見られた病院が84、1984年では1200中156あったという(菊池2001)。村田が「あちらこちら」にあるという病院図書館は、おそらく、「医事記録部」「医学図書部または医局図書室」「職員図書部」「患者図書部または読書療法部」のすべてを含めたものではないかと思われる。ただし、村田は、ふつう「病院図書館(Hospital Library)」と言う場合は患者図書館(Patients' Library)を指すと断ってはいる。しかし、村田はさらに続けて、一生懸命探してみてもどこにも「図書館」と呼ばれるべきものが見当たらず、書庫が無造作に放置されているだけだったとも書いているから、実態は菊池が指摘する程度のものであったと思われる。

ところで、村田弘はこの論文で、「近頃『病院』に勤めた私は」と書いている。村田が勤め始めたという病院は、おそらく、のちにみずからの論文をその雑誌に転載した国立療養所長島愛生園であったと思われる。『長島愛生園30年の歩み』によれば、村田は1950年2月15日から1951年3

月 31 日までと 1953 年 7 月 21 日から 1955 年 10 月 16 日までの 2 回愛生園で書記として勤務している。そうすると、村田が病院患者図書館や読書療法に興味を覚え、そのことを調査・研究し、論文を書いて病院患者図書館の必要性を世に訴えている以上、みずから勤務するハンセン病療養所の図書館（ここでは図書室と呼ぶべき規模のものを含む）の有無ないしその実態に関心を示し、みずから働く現場で図書館改善に向け何らかの実践をしたのではないかという期待が生じる。

この小論では、まず、ハンセン病療養所における図書館ないし図書室の実態を明らかにし、つぎに、ハンセン病療養所において図書館が果たした役割を考察する。最後に、ハンセン病が治る病気となり新発患者が出ず、他方で高齢化により入所者が減少の一途を辿る中で療養所図書館の役割を展望する。ハンセン病回復者が住む国立療養所は全国に 13 あり、詳細に述べると膨大な量になるので概括を試みるが、それでも本稿は上下 2 回に分載とせざるをえない。

なお、病院や療養所の図書館は他にいろいろある中で、なぜハンセン病療養所を取り上げるかについて、一言述べておきたい。日本のハンセン病政策は過去 100 年にわたりハンセン病患者ないしはそれと疑わしいと見られた人たちを強制的に療養所に終生隔離して、ハンセン病の撲滅を図るというものであった。しかも、療養所とは名ばかりで、当初は警察官が管理する文字通りの収容所であった。戦後、特効薬が登場しハンセン病は治る病気となったにもかかわらず、さらには、1996 年にらい予防法が廃止され 2001 年には国家賠償請求訴訟で原告が全面勝訴し国の誤りが確認されたにもかかわらず、国家レベルで展開されたハンセン病患者排斥運動の影響はいまだに消えず、名前を伏せなければ退所しても働いたり居住したりできず、家族のもとにも故郷にも帰れず、死んだら遺骨は療養所内の納骨堂に収められるのが大半である。他の病気であれば、治れば退院して社会復帰するが、ハンセン病の場合は回復しても退所できないか、退所しても「元患者」というレッテルを一生身に背負う生活を強いられた。つまり、熊本地裁判決にあるように、ハンセン病の患者となった人はまさに「人生被害」を蒙ったのである。したがって、同じく病院患者図書館と言っても、ハンセン病療養所では、利用者がそこで一生を過ごす場における図書館である。監視が厳しい時代には外出して書物を購入することなどできないし、就学前や学業半ばにして療養所に入所した青少年も多い。また、園内で入所者は介護から土木までさまざまな作業に従事させられて読書する時間が持てなかったり、1960 年代まで雑居生活が一般的で静かに読書する場所さえなかったりした。そういったことを考慮すると、我が国のハンセン病療養所における図書館の役割は、一般の図書館はもちろんのこと、他のもろもろの病院患者図書館ともかなり違った役割を持ったであろうことが容易に推察される。しかし、このことについて、これまでまとまった研究も報告も存在しないので、浅学を顧みず、しかも門外漢ながら、あえて一文を草して問題提起としたい。

1. ハンセン病療養所の図書館の実態

ハンセン病のための国立療養所は全国に13ある。松丘保養園（青森県、1909年開設。所在地と開設年。以下同様）、東北新生園（宮城県1939年）、栗生楽泉園（群馬県1932年）、多磨全生園（東京都1909年）、駿河療養所（静岡県1944年）、長島愛生園（岡山県1930年）、邑久光明園（岡山県、前身の外島保養園は1909年）、大島青松園（香川県1909年）、菊池恵楓園（熊本県1909年）、星塚敬愛園（鹿児島県1935年）、奄美和光園（鹿児島県1943年）、沖縄愛楽園（沖縄県1938年）、宮古南静園（沖縄県1931年）がそれである。私立は現在2つあるが、調査未了のため今回は除外した。以下の記録は一斉調査によるものではなく、それぞれの療養所について入手した資料にバラツキがあり、各療養所の年報も発行の頻度や時期が不揃いではあるが、一定の概要はつかむことができる。

九州療養所（のちの菊池恵楓園）の1934年度統計年報に、「図書館ヲ設ケ一般患者ニ対シ自学自修ヲ奨励スル結果、曾テハ郷里トノ音信サヘ意ノ如クナラサリシ者モ今ヤ自由ニ通信シ得ル者多キニ至レリ其ノ外短歌、俳句、文章等ヲ創作シ各種ノ雑誌ニ投稿シテ入選スルモノ少ナカラス」との記述があり、同一文がその後の年報にも掲載されていることから、これ以前の年報にも同文が掲載されていたと思われる。なお、1936年度の年報には「学校並図書館」として26,890坪1棟の記録があるが、1937年度の年報では「図書館26,890坪」と区別して「九療学園42,000坪」（園内教育機関である「檜小学校」を「九療学園」と改称）と記述されており、この年に図書館が学園と分離して1棟割り当てられたことがわかる。ちなみに、この図書館は1938年度の統計年報に「檜の影文庫」という名称で記録されている。

第一区府県立全生病院（のちの多磨全生園）の1935年度統計年表では、「院内図書室ハ本院見学ノ学生諸氏及特志家〔ママ〕ノ寄附ニ依リテ漸次充実シ図書ノ閲読及ヒ稗史小説ノ貸出シヲ為セリ之ニ依リ多数ノ盲目患者ハ団楽シテ小説ノ朗読ヲ聞クコトヲ一ツノ楽シミト為セリ」と記述され、翌1936年度の統計年表には、全生図書館開館式の模様が次のように記録されている。「昨年未ヨリ患者ノ手ニ依リ建築中ノ全生図書館ハ四月工事竣工タルモ尚内部ノ設備其他ニ日時ヲ要センヲ以テ十一月旧図書館ヲ此処ニ移転シ十二月十五日開館式ヲ挙行シ併テ本院学園児童学芸品展覧会ヲ開催シタルニ近隣町村小学校ヨリ七百余点ノ出品アリ頗ル盛会ナリキ来賓トシテ中山田無警察署長榎本本村町、小池本村小学校長他近隣小学校長並ニ教職員等多数列席セラレタリ」「全生図書館 一棟 木造平屋瓦葺 四五坪五号」。

長島愛生園の1937年度年報では、書庫として木造平屋建8,000坪1937年3月15日竣工とあり、寄付金品調として、書籍は1931年862部、1932年353部、1933年237部、1934年2047部、1935年796部、1936年606部、1937年938部、雑誌は1931年908部、1932年1612部、1933年1646部、1934年3786部、1935年3470部、1936年26319部、1937年8469部、新聞は1932年1454部、1933年3149部、1934年5075部、1935年3067部、1936年1684部、1937年1387部と記録され、

「愛生図書館の蔵書は本年末に於て実に 3700 冊を数ふるに至り、入園者の読書慾を充足せしめつゝあり」と記されている。

宮古南静園の 1937 年度年報でも「特に所内に図書室を設け、各種新聞、雑誌を初め寄贈図書を閲覧せしむ。単行本の如きも昭和 12 年末 943 冊に達したり」、1941 年度年報でも「昭和 16 年末現在 2505 冊となり。尚本年中 (昭和 15, 16 年) 寄贈せられたる新聞類は 2091 部其他書籍 (雑誌を含む) 2624 部に達したり」と、蔵書数は異なるものの、他園と似たような記述が見られる。

要するに、ハンセン病療養所では早くから図書館ないし図書室が設置され、入所者の教育・学習の場として位置づけられていたが、とくに戦前では蔵書の多くが園内外からの寄贈によるものであったことがわかる。しかし、いわゆる“お役所”的な定型文書ではわからない実態はどうであったのか、入所者の立場から見てみよう。

松丘保養園の図書館について、1955 年の現況として福地幸健はつぎのように報告している。図書館は「22 坪の 1 室で会議室と閲覧室と書庫との兼用であり、どれが主か解らない——と云う様な、実にお粗末なもので、書籍も一応、分類して居るが、書棚の関係上、正確な分類、種別はなし得ず、従つて全く我流的な分類法でゴマ化して居る」。蔵書の内訳は、大衆文学 254 冊、日本文学 363 冊、訳文学 146 冊、社会科学 66 冊、精神文学 24 冊、各宗教 133 冊、参考書 77 冊、短文芸 107 冊、児童文学 48 冊、点字 7 冊、岩波、新潮各文庫 63 冊、藤楓文庫 249 冊 (藤楓協会より寄贈)、鈴木文庫 63 冊 (東京都鈴木満男氏より寄贈)、鈴蘭文庫 147 冊 (北海道救癩協会より寄贈)、総計 1869 冊である。数字上は多く見えるが、利用者のレベルや個性は多様だからとても一般の需要を満たし得ないという。その理由は、図書費が皆無だということ、つまり療養所予算に文化教養費がまったく認められていないことにある、と福地は指摘する。

「これは予防法改正運動以来特に強くしかも、再三要望しているのであるが未だに本省はその必要を認めず一銭も予算化して呉れない。」「たゞ我々入園者の血と汗 (病者として重労働であるからこう云わせて貰おう) による僅かの事業収益金の中から極く少額の書籍費がでるだけで、これとても限定版と云う紐つきであつて、良書だからとて早速買って戴く訳にはいかないのである。」

同じく松丘保養園の入所者苅田省三は 1963 年にこう記している。

「現在、3400 冊近い本がありますが、その 80 パーセント以上が小説、全集物、あるいは文庫本で占められています。これだけの蔵書なのに、図書館はせまく、本棚は一杯で弱っておりますし、本棚に余り詰めれば、出し入れに破損することはなはだしく、本棚の要求をしてあるのですがこれだつて見送られた形です。」「先日、園長先生の異動があり、草津楽泉園に栄転なされた阿部前園長より多くの書籍の御寄贈がありました、戴いても収める本棚は足りなく、物置の中に藏つて置く始末です。参考書類もありますから、早く整理し活用したいのですが、努力の甲斐もなく、徒らに良書を眠らせて置くよりありません。」

福地の時代同様に図書館の不備が嘆かれる状況は変わっていない。

栗生楽泉園は1933年開設の翌年の年報に患者作業として「図書」が挙げられていることから、開設と同時に図書室があったことがうかがわれる。その後、各所を転々として、1954年に所定の場所を確保した。1987年の記録に蔵書7000冊とある。

多磨全生園については、1909年に全生病院として開設した翌年のこととして、「明治43年東京浅草本願寺全生病院慰安会といふスタンプを押した、東京大川屋発行の講談が3、400冊6尺の戸棚に入って礼拝堂の南側の一隅にあつた娯楽文庫と云つて1週1回づゝ午後1時から2時迄約1時間の貸出であつた」という栗下信策の記録がある（栗下1929）。また、宗教書や國漢文叢書などの寄贈本は見張所役人が病者に貸出していた。その後1921年8月1日に全生図書館が開設された。館則として、「本館を全生図書館と称し院内娯楽室内に置く」「本館の書セキは職員及び一般社会の有志者より寄贈せられたる新聞雑誌および単行書を以て之に充つ」「患者の文藝趣味を鼓吹し内面的生活の向上を計る機関とす」「本館は委員8名を置き総ての事項を協議せしめ其内より係員1名を選定し館の常務を処理せしめ特に各舎長を相談役とす」と定め、三省堂の百科辞典を始めとして仏教大辞典、国語大辞典、國漢文叢書、夏目漱石や森鷗外、島崎藤村、その他の明治大正文学、世界文学、戯曲、仏教説話、国訳大蔵経、講談、修養、仏教童話、等々、単行本は1000余冊、新旧雑誌は800冊程の蔵書を得た。図書の貸出時間は毎日午後1時より4時、館内閲覧は昼夜公開しているという。

だが、この図書館は1923年9月の大震災により倒壊し、1924年に再建されたが、相変わらず娯楽室の間借りであった。1936年11月10日に、大正博覧会で使用された瀟洒な建物2棟が払い下げとなって神社通りに即して南北2箇所建てられ、そのうち南の1棟が図書館とされた（現在も美容室・理容室として使用されている園内最古の建物）。これは、玄関、読書室、書庫、係員詰所、製本室も備えた独立の建物であった。開館直後の11月21日には早速図書館開館記念短歌会が開かれ、12月15日には開館式が行われ、田無警察署長、東村山村長、地元の小学校長等が列席した（警察署長が列席している点に、戦前のハンセン病療養所の位置づけが垣間見られる）。この図書館は、1977年1月にハンセン氏病図書館が西梅林近くに新築されるまで使用された。独立の建物として図書館ができたと言っても、その内実は1960年代に至ってもまだ貧弱であったことは、多磨全生園入所患者代表の高林米吉が1965年12月に東京都議会議長宛に提出した請願書により明らかである。すなわち、そこで高林は入所患者に対する文化助成金支給を請願し、国からの支給では最低の生活を維持するに精一杯で、「図書や新聞等を購入する経費、ラジオやテレビを園内に何台か設備するための経費、囲碁や将棋などの娯楽、菊や草花をつくり、盆栽をつくる趣味等を助成する経費等ではありますが、こうしたものは殆ど計上されておりません」と訴え、具体的な要求の1つとして「図書購入費として年間1人1冊程度を援助していただきたい」と述べている。年間1人たった1冊であるが、当時はそれさえ遠い夢であった。

長島愛生園は、全生病院長であった光田健輔が園長として赴任する際に全生病院から開拓患者として81名を連れていったこともあって、早くから諸施設の整備に取り組んだが、その開拓転園患

者の 1 人に、全生病院で図書館作りに励んだ栗下信策がいた。『俱会一処』によれば、栗下は全生病院在院中に図書館係として社会の著名人や本願寺等に本の寄贈を依頼する手紙をさかんに書いて図書の充実を図ったり、園内雑誌『山桜』を創刊したりするなど、療養所の文化的向上に貢献した。資料保存に熱心だったと言われる光田園長の意向もあり、愛生図書館は 1930 年の愛生園開設と同時に創設された。開館 3 年目で蔵書は雑誌も含めて 2300 冊あったと記録されている。1933 年 11 月 20 日から 12 月 19 日までの 1 ヶ月間に閲覧者 4356 人、貸出数 973 冊とあるから、その利用率も他園を抜いている。冒頭に紹介した村田弘が勤務した愛生園における図書館は、彼の期待に応える内容をすでに戦前から備えていたと言えるだろう。長島愛生園入所者自治会発行の『隔離の里程 長島愛生園入園者五十年史』に、「昭和 26 年 9 月には、日本図書館協会及び岡山県図書館協会に加盟した。司書の資格をもつ職員（村田弘）が着任したことが館の整備を促した」と記されている。愛生図書館の概況について本書に即して、もう少し詳しく見ておこう。

前述のように、愛生図書館は愛生園開設と同時に開館したが、それは他園と同様に総合文化センターの観のあった礼拝堂の一隅に設けられたにすぎない。開館時間は午前 8 時から午後 8 時まで。戦前には閲読制限があり、1937 年 3 月に開かれた全国癩療養所事務打合会の議題に「患者出版物等の閲読制限に関する件」があったという。そのような思想統制下で入所者はさまざまな手段を考案した。次のような事例もあった。

「入園者中根文二一時帰省中旅先ヨリ禁制品トランプ一組、月干〔ママ〕誌解放（解放社出版）、佐野学著プロレタリア日本歴史（白楊社出版）、山本宣治著現代ノ両性問題ノ三件ヲ看護婦山地鶴子ヲ介シ入園者東香ニ手交セント小包便ニテ送付セルヲ以テ同人ノ非ヲ糺シ訓戒セルニ自己ノ全ク軽挙ナルヲ悔悟セルニヨリ特ニ始末書ヲ提出セシメ今後絶体〔ママ〕ニ斯ル悪性行為ヲ再犯セザル様留意セシ次第有之右始末書別紙ノ通供覧候也（昭和十一年一月二十日）」

多磨全生園で図書館員を務めた宇津木豊と田代馨は、『中央公論』はアカで駄目だったが『改造』は良かった、新聞にも検閲があって事務所の気に入らない記事は切り抜かれた、と座談会で語っている（『多磨』1959.10）。

愛生園に話を戻すと、そこでも独立した図書館の要望は早くからあったが、1940 年によく空いた患者事務所の桃源寮に移転できた。戦後は 1947 年に光田文庫 89 冊、1950 年に栗下信策所蔵の『新国訳一切経』78 巻を含む仏教書等 400 冊、明石文庫 19 冊などの寄贈があり、徐々に蔵書の充実が図られた。そして村田弘により図書館の整備が進められ、1955 年 11 月モルタル平屋 30 坪の新しい図書館が落成、図書館法による十進法分類が初めて実施された。また、1963 年よりハンセン病関係の図書を集めたコーナーが館内に設けられた。1965 年 9 月、愛生園内に全国療養所で唯一の高校である岡山県立邑久高校新良田教室が開校され、図書館の役割が増大した。「話題の新刊書が入るときなどは開館前の玄関に行列ができたりした」と 50 年史は記している。もっとも、豊田一夫は愛生図書館の問題点を指摘し（豊田 1959）、1957 年から患者作業の半日制が実施されたあおりを受けて開館時間が制限されたため、「授業が終ると早速息せき切って駆けつけてみれば、

いつも門は固く閉ざされている」現状を「宝のもちぐされ」と批判し、「何のための図書館かさっぱり分からない」と嘆く一面もあったようである。それにしても1982年段階で蔵書が14,496点というのは見事である。その内訳は、総記444、哲学1826、歴史777、社会科学537、自然科学338、工学87、産業127、芸術410、語学56、文学3817、日本文学2398、その他236とある。

愛生園と同じ島内にある邑久光明園は、かつて大阪にあった外島保養院が水害で壊滅したためにこの地に1938年に再建されたものである。光明園で図書館活動が活発だったのは1950年代に集中している。1951年4月27日、開園記念日に入所者図書館と岡山市連絡事務所の建設を目的に邑久光明園後援会が発足し、岡山市長が会長に就任、県ならびに県下9市、各法人、諸団体、高等学校などに支援を働きかけたこと、および、1953年から58年まで職員として勤務した森幹郎の影響がとくに大きいと思われる。森は濫救惰眠論を発表し、ハンセン病が治った人を療養所に入所させておくのは濫救であり入所者を惰眠にすると書いたが、それは行政よりも入所者に強い刺激を与えた。「惰眠」を「惰民」と受け取る感情的な反発もあったが、これによって入所者が奮起させられたことは事実である。森は事務職員として就任し、文化教養係として、高校の通信教育や成人教育講座を始めたり、盲人会で点字講習会を実施したり、全国の療養所内の小中学校教員の全国会議を開催したりするほか、図書館の整備をし、蔵書を日本十進分類法に基づいて整理するなど、矢継ぎ早に療養所の文化的改革に着手した。

光明園の雑誌『楓』の1953年8月号は図書館特集を組み、本稿巻末の参考文献一覧で挙げたように、6本の論文や資料を掲載した。森幹郎はそこで、病気になったら難しいことは考えないでノンビリしろというのはおかしい、それでは一生不治の病魔に犯された人は一生頭脳を空っぽにせよと言うに等しい、頭脳まで休養する必要はない、と主張する。「たとえ、肉体は病気になって、その身は病床に臥さねばならなくなつたとしても、社会の一成員として、十分にその精神を活動させるがいい。否、その活動をやめてはならないと思うのだ。それは人が『人間』たることをやめない限り、やめてはならない、と云うよりも、『考えること』『読むこと』は人間にのみ与えられた特権ではあるまいか！」と檄を飛ばしている。木下吉雄は図書館設立の意義を説き、敗戦後に起きた精神文化の高揚を図書館建設によって具体化しようと訴えた。「邑久光明園図書館設置主旨」は、図書館建設の声は「全患者の魂の叫び」だとし、入所者が「疾病の治療に励むと共に、傷つけられたる精神を癒やし、肉体の汚損を、精神面を健全にし輝かすことを以て補ひ且つ生甲斐と感ずるやうになるのは洵に自然なこと」と指摘している。中島溥は、「吾々は自己自身の完成の為に情熱を傾けて死ぬまで努力と精進とを続けねばならぬ」と言い、「吾々の読書意欲を十分に満すに足る豊富な書籍と、静かに心おきなく読書を楽しむ得る良き環境である図書館と云う設備が必要となつてくる」と訴えた。「実社会との交通を遮断され、病気と闘い20年かゝるか30年かゝるか、或いはこれに一生を費さねばならぬかも知れぬ境遇の中にある私共は、又それぞれが一箇の人間である以上、基本的人権の尊重、確立と云う立場から人間としての知識と教養とを身につけ得る完全なる文化設備は、長期療養を余儀なくせしめられている吾々にも与えらるべきである。」これらの発言はまさ

に森の檜によって奮起させられたものと思われる。

檜を飛ばすだけでなく、前述のように、「本の物置」に置かれているに等しかった書物は整備整頓され日本十進分類法に従って整理された。1954 年 3 月 3 日現在、蔵書数は 1741 冊、内訳は、総記 74、哲学 237、歴史 76、社会科学 96、自然科学 59、工学・工業 17、産業 7、芸術 38、語学 12、文学 225 であった。さらに、病室への巡回文庫を行い読書人口の増加に努めた。『楓』編集部は「図書室訪問」という記事をまとめ、図書館の分類別蔵書数や貸出調査結果を公表しているが、この集計・分析作業はその後図書館員によって 1960 年に至るまで毎月詳細に報告されている。こうした実質的な努力が実って、1954 年 6 月ついに念願の図書館が落成した。これは、藤楓協会福井県支部からの寄贈によるもので、福井文庫と名づけられた。坪数 20、木造平屋建で、書庫、事務室、休憩室などがあった。差し込みコンセントが 8 つあり、玄関のスズラン燈も含めて電燈は 17、眼の悪い人が楽に読書できるように電気スタンドも用意された。また、書名カード、著者名カードが作製されるなど、非常に使い勝手の良い近代的な図書館が完成した。

大島青松園は、図書館と言えるほどの設備をなかなか持てなかったが、1978 年 1 月によやく四国四県寄贈図書館が開設された。蔵書数は不明だが、青松園の入所者が出版した作品が、月刊誌『青松』の合本 20 冊を含めて 129 冊あり、ほかにハンセン病関係の図書が 167 冊所蔵されているという。記事を書いた橋田芳明はハンセン病関係図書について、この種の本の貸出がほとんどないのは、「患者自身が読むものではないと思うし、気分のよいものではない」からだと言っているが(橋田 1980)、あとで言及する多磨全生園の松本馨によるハンセン病図書館建設の精神と極めて対照的で興味深い。

菊池恵楓園の図書館事情についてはまだ調査不足の段階だが、1964 年時点では 30 坪の建物の半分が新聞閲覧室で他の半分が図書室となっており(清原 1964)、1970 年 2 月現在の蔵書数は小説 1598、随筆・評論 595、詩 98、短歌 286、俳句 162、翻訳 1046、宗教 235、全集 949、社会・哲学 206、教育 467、文庫 93 で、合計 5735 冊である(山村 1970)。山村は、1500 人の入園者が利用することを考えればこの数字は圧倒的に少ないと指摘し、年間図書費は 10 万円に充たないが、自治会はこれをさらに 5 万円に削減したと言って憤激している。

鹿児島と沖縄にも各 2 園があるが事情は大差ない、つまり、邑久光明園を例外として少なくとも近年以前はいずれもさほど充実したものではない。こういった実状には主として 2 つの理由が考えられる。1 つは外面的な問題であり、そもそも療養所の予算そのものが低く抑えられていたために、各自治会や全患協(全療協)などの組織がつねに経済闘争を強いられ、医療と居住環境の充実を求めることで精一杯であったこと、つまり文化・教養費への手当が薄かったこと、もう 1 つは入所者の内面的な問題であり、失明などの身体障害、終生隔離による人生への絶望、さらには園内作業による疲れ、雑居による読書環境の悪さ等々により、図書館の利用者が多くはなかったことである。後者の点についてもう少し言及しておこう。

松丘保養園では、1965 年時点で入所者 711 名、図書貸出状況は娯楽 34%、月刊文芸 2.23%、時

事7%、日本文学7.03%、翻訳文学2.81%、その他4.92%で、読まない人が42.01%いるという(福地1965)。詳細な読書分析をしている邑久光明園では、1958年3月現在の在籍者910人、そのうち盲人会員122人、重病棟入室者88人で、読書可能者は700人とある。貸出数は内外の小説、物語等が圧倒的に多く、続いて推理物、スリラー物で、その他、心理学、剣豪、肉体と続き、壺井栄や源氏鶏太の作品が長く読まれているという(白川1958)。こうした傾向について白川は、読書率が非常に低いと指摘し、さらにつぎのように述べている。長いが引用する。

「平均して見ると読書可能者1人月に0.59冊強より読んでいざ女子に至つては、0.13冊強となり、8人で月に1冊より読んでいない事になる。この数字も実際は、盲人会員が入室していて重病者として重複削減してあり、入室者も付添人を通じて借りだしてをり、ベッドに臥した切りで読書を禁じられている者は極く僅かで、読書率は更に低いものとなるだろう。／この様に読書率の低い理由としては、最近週刊誌の愛読者が増加し、個人で講読している人が多く、そうでない人でも充分閲覧して帰れる事や、図書室に書籍数が少ない事等、色々な事が言われ、特にプロミンで軽症者に社会復帰の光明が与えられ、更に最近になって脱眉、曲指、歪貌の整形が広く施行され益々復帰希望が持て、園全体が明るくなり活気付いて来たからだとも言われる。そうしてそれを肯定するに足る節は多々あるにはある。しかしだから読書出来ないと言う事には肯けない。何もじめじめした沈んだ環境に於てのみ読書はなされるのではない。／入園者が希望に溢れ活気付いていると言う事を裏返しに言えば、浮足立つて足が地に付いていないと言えるのではなからうか。寧ろ読書率の低調は園内にテレビが設置され、労せずして結構楽しめ、又個人ラジオが許可されて何となく騒がしくなつて来て、落着いて読書出来ない、と言う方が当つてはいないだろうか。」

戦後一時期は「現実逃避の娯楽代りに読書に熱中」し「新しい知識にうえた患者」(『高原』1987.7)が足繁く図書館に通ったが、入所者の高齢化とテレビ等の普及で、長島愛生園でも1970年頃には図書館の利用者が減少し「いつ行っても閑散であり、徒らに書棚に並ぶ新刊書の背文字を、深い冬日が照らして」(今西1971)いるとか、栗生楽泉園では1987年には図書館利用者が新聞閲覧者も含めて毎月20人しかいないとかと報告されている。愛生園の統計によれば(『隔離の里程』)、閲覧者の年間延人数は、1955年13,014人、1960年13,497人、1965年17,323人、1970年7,095人、1975年3,869人、1980年1,977人であり、今西康子の表現が決して誇張でないことが裏づけられる。

こうした条件の変化のもとで療養所の図書館が療養生活の中でどのように位置づけられたか、入所者等によりどのように理解されていたかについて、節をあらためて見て行きたい。

2. ハンセン病療養所における図書館の役割

戦後に特効薬プロミンが登場する前は、病気や後遺症のほか、終生強制隔離、外出禁止、職員の

差別的抑圧的対応、食糧難等による最低生活、雑居、断種・墮胎、等々、ハンセン病療養所の入所者にとっては不安と絶望と怒りの日々が続いた。しかしまた、そうした状況に負けまいとして入所者は互いに助け合い励まし合った。1923 年の関東大震災後の苦しい時代に図書館の係を務めていた原田樫子こと原田嘉悦は、入所者を励まそうとして檄を飛ばした。それは、のちに少年寮で“お父っあん”と親しまれた原田らしいユーモアとヒューマニズムに溢れた文章である。

「各自が通常労働の傍ら休暇を得た場合は唯空しく無益なる言論に耽ったり鼻糞をほじくりながら隣の人のアアでも探して何か言ったり、阿保草を燻らして専売局の奉公をするよりは斯うした図書館に足繁く運んで有益な本でもたっぷり読んで精神的に向上することがその人達のためにどんなに幸福であるか知れません。」

夏目漱石が言うように、精神的に向上心がないものは馬鹿である。「実に人生に取って精神的向上、所謂内容の充実を計ることが最上の本務であります。」こう言うと、われわれの境遇で勉強して何になると言う人がいるが、それは甚だ浅薄な考えであり、人生の目的は幸福にのみあり、誰一人として幸福を望まぬ者はいない。するとまた、俺は望みも願いもない情熱もなければ勉強もしないと厭世観じみた泣きごとを言う者がいるが、「思ふにそれは虚偽であります。事実左の様な人があるなら生きて居られる筈がありません」と原田は言う。私たちはより多くの幸福を求めべく努めなければならず、そのためには勉強しなければならない。したがって、「図書館は私等の為に設けられた恵みの倶楽部であります」。こう述べて、聖書の一節を振ったつぎのような標語を掲げている。「悩みある者又不愉快に陥れる者は図書館に來れ、図書館は必ず汝等をして幸福と愉快とを与えしめん。」——まあお互いに肩の凝った時にはお茶でも飲んで楽しみましょう、と原田はこの檄文を締め括っている。

邑久光明園の伏谷伸は、かつてのみずからの生活を振り返り、「哀しく、みすばらしいようであるが、又何かしら、美しい魂の動きが感じさせられる」としてこう述懐している。

「大病を背負って、狭い療園の中でうめき合う療友は、一様に空虚であつた。何かしら、しらしらしく、唯、毎日の闘病生活に疲れ果て、ゆくだけが認められるように思われた。比較的元気な者は、スポーツに依って幾許かの時間を闘病生活から逃れ出る事が出来た。又年老いた人々は、老齡が齎らず、宗教の世界へ身を翻して安んずることが出来た。／然し、こうして幾分でも闘病生活の糧をあがなつてゆけるものはひにくな程少なかつた。その殆どのものが、縋りつく術のないものばかりであつたのだ。／こうした、大多数を占める療養者が、何に依つて長い闘病生活を支えてゆこうとしたか……。それは、まぎれもない、本を読むことであつた。」「昼間でも薄暗いような狭い陋屋であつたが、一応図書室と呼ばれるようになったことは、何んと云つても私達の云い知れぬ感激であつた。何かしら力強いよりどころを得たような感じもしたのだつた。其の証拠に、此の質素な図書室が頻繁に活用されたのであつた。正に老若男女を問はずの状態であつたのだ。恐らく病と闘うための切実な欲求が、こゝに溢れ出たのであろう——。」(伏谷 1954)

長島愛生園の今西康子は、1940 年頃の生活を振り返り、当時ラジオは各舎になく、ましてテレ

ビもなく、映画上映もまれで、あらゆる娯楽を遮断された状態にあったが、当時大多数を占めていた二十代の青年男女や中老年の人びとは各作業場各居住棟で雑談をし、茶呑み話をし、あるいは知人友人を訪れて会話をし、また夜ひそかに相愛する男女が対話するのを楽しみにしたと言う（今西 1971）。その延長線上に図書館があった。

多磨全生園の鈴木楽光は、昔を振り返り、次のように報告している（鈴木 1972）。

「若い人たちにとって図書館は、娯楽というより救いのオアシスのようなものでした。」図書館と言っても実状は畳もぼろぼろで、冬は畳の上に南京袋を敷いて座布団の上に座った。「うす暗い所ですけど、百燭電燈が、こうこうと輝き、それがうれしくてね。」居住している舎は午後 10 時消灯で、しかも天井の高い十二畳半に五燭しかないのでも本が読める状態ではなかった。「貸出禁止の本や、新刊書なども入ってきたりするので、どんなに苦しくても、昼間働いて疲れていても図書館に行くのが楽しみでした。読み疲れて、そのままグウグウ寝てしまったこともあります。」常連は深夜 11 時 12 時まで図書館に居座って本を読み、「そのあげくにですね。今から引きあげうどんでも食おうではないかというのがいてね。そこでうどんを持ってきて茹で、生醤油と削りぶしを入れて、ろくろく煮えてもない熱いのを、ふきふき食べました。」そして図書館の役割を「私たち若い者にとって、教養をつけてくれたり、人間的に高めてくれる修練道場のようなものでした。苦しい療養生活を支えてくれた大きな柱であったと思います」とまとめている。

長島愛生園の豊田一夫は、戦前に 1 年ほど大島青松園で過ごした日のことに触れ、その図書館はまったく理想的だったと述懐している（豊田 1959）。ここでは開館時間がなく、「どんな真夜中でも電燈が煌々と輝いていて、自由に本をとり出して読書できた。そのおかげで、「死ぬことばかり考えていたちょうど少年期から青年期へとうつりかけの時期にあった私は、その当時の焦々した日々をどんなに慰められたかわかりません。なにしろそとと違い、わずか一分間もかかれば終ってしまう治療を終わってしまえば、もうあくる日の朝までご隠居さんみたいに布団にもぐりこむ以外に何の用事もないというのに、海ばかりに囲まれたこの島の中には、本屋さんなんかはもちろん一軒の商店もないのですから、いまでも十年前でも、若い者にとっては図書館だけが魂の慰安場所だと私は信じております」。邑久光明園の飯沼俊三は、療養所内のこうした図書館の役割を「学校の様な」と形容し、「購入される図書は教科書を兼ねている」と指摘している（飯沼 1953）。

（つづく）

【付記】

本稿（下）の公開はしばらくのちになるので、以後の内容を簡単に予告しておきたい。

上記に続き、実際に図書館業務に従事した人ならびに図書館を利用した人への聞き書きを紹介する。次に、療養所内外の環境の変化に伴い療養所図書館の機能も自ずから変化せざるをえない中で、多磨全生園の松本馨が提起し実践したハンセン病関係の資料を収集する図書館づくりを取り上げる。多磨全生園内にあったハンセン病図書館、ならびに長島愛生園の歴史館と神谷書庫を主として扱い、高松宮記念ハンセン病資料館およびその後身の国立ハンセン病資料館にも言及する。

【参考文献】 (著書以外は筆者のホームページに掲載 <http://www11.plala.or.jp/tamast/zens.html>)

- 栗下鹿骨「図書館通ひ」『山桜』第 4 巻第 2 号、1922 年 3 月、1-2 頁
原田樫子「復興の図書館と私の感想」『山桜』第 6 巻第 10 号、1924 年 12 月、15-18 頁
栗下信策「図書室」『山桜』第 11 巻第 9 号、1929 年 9 月、38-39 頁
川口 清「感謝とお願ひ」『愛生』第 6 号、1934 年 6 月、44-46 頁
九州療養所『昭和九年度統計年報』1935 年 4 月、23-24 頁
図書係員後藤生「全生図書充実の為に」『山桜』第 17 巻第 11 号、1935 年 11 月、14 頁
第一区府県立全生病院『昭和十年統計年表』1936 年 3 月、56 頁
「待望の図書館竣工に際し世人の御同情に訴ふ」『山桜』第 18 巻第 9 号、1936 年 9 月、38 頁
鈴木庫治「図書開館記念短歌会」『山桜』第 18 巻第 12 号、1936 年 12 月、22-24 頁
「彙報 全生図書館の開館式」『山桜』第 19 巻第 1 号、1937 年 1 月、33 頁
第一区府県立全生病院『昭和十二年統計年表』1937 年、25-26 頁
長島愛生園『昭和十二年年報』長島愛生園、1938 年 3 月、50 頁
宮古南静園『昭和 12 年年報』1939 年 1 月、22 頁
長島愛生園『昭和十三年年報』長島愛生園、1939 年 3 月、53 頁
宮古南静園『昭和 15/16 年年報』1943 年 1 月、19 頁
全生会々長渡辺清二郎・文化部長近藤隆治「御願書」林芳信園長宛て、1951 年 6 月 13 日
全生会々長原田嘉悦・文化部長光岡良二「御届書」林芳信園長宛て、1952 年 2 月 2 日
「座談会 若い人大いに語る」『多磨』第 33 巻第 10 号、1952 年 10 月
村田 弘「病院図書館の ABC」『愛生』第 6 巻第 10 号、1952 年 10 月、27-37 頁
木下吉雄「邑久光明園図書館設立について」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、2-4 頁
神宮良一・星島義兵衛「邑久光明園図書館設置主旨」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、5 頁
森 幹郎「療養所と読書」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、6-7 頁
中島 溥「図書館設立を希う」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、8-10 頁
飯沼俊三「図書購入に就いて」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、11 頁
瀬川秀夫「読書生活とラジオ」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、12 頁
羽里譲二「図書室は貸本屋ではない」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、13 頁
編集部「図書室訪問」『楓』第 7 巻第 9 号、1953 年 8 月、14-15 頁
森 幹郎「図書の整理」『楓』第 8 巻第 4 号、1954 年 4 月、18-20 頁
M「福井文庫等寄贈さる」『楓』第 8 巻第 4 号、1954 年 4 月、20 頁
羽里譲二「図書室だより」『楓』第 8 巻第 6 号、1954 年 6 月、32-34 頁
羽里譲二「図書室便り」『楓』第 8 巻第 7 号、1954 年 7 月、40-41 頁
伏谷 伸「福井文庫に寄せて一小きな回顧」『楓』第 8 巻第 8 号、1954 年 8 月、22-23 頁
川村壽雄「福井文庫竣工を祝して」『楓』第 8 巻第 8 号、1954 年 8 月、23-24 頁
千島染太郎「職場雑感 図書室一あるいは Y 嬢への手紙」『楓』第 8 巻第 9 号、1954 年 9 月、8-11 頁
井下英二・仲信一郎「図書室便り」『楓』第 8 巻第 11 号、1954 年 11 月、18-24 頁
「読書傾向並実態調査表 10 月分」『楓』第 8 巻第 12 号、1954 年 12 月、105-106 頁
宮川・仲「図書館だより」『楓』第 9 巻第 3 号、1955 年 3 月、20-21 頁
福地幸健「松丘に於ける図書館の現況」『甲田の裾』第 26 巻第 10 号、1955 年 10 月、9-10 頁
白川 清「図書室よりみた光明園の表情」『楓』第 21 巻第 5 号、1958 年 5 月、23-26 頁
「公民図書館設立についてのお願ひ」『菊池野』第 8 巻第 5 号、1958 年 8 月、22 頁
豊田一夫「図書館の管理方法について」『愛生』第 13 巻第 5 号、1959 年 5 月、1-4 頁
「〈座談会〉学園、少年団、児童寮、図書館、絵の会、書の会」『多磨』第 40 巻第 10 号、1959 年 11 月、42-45 頁

- 長島愛生園『長島愛生園30年の歩み』1960年1月
「白書 全生図書館」『多磨』第41巻第10号、1960年10月、6-8頁
野上 徹「楽しく読む一光明園図書室の一ヶ月」『楓』第24巻第2号、1961年2月、5-12頁
堤比登志「購書から読書への反省—全国文芸募集作品随筆佳作」『楓』第267号、1963年1月、8-10頁
天野武雄「新点字図書室に寄せて」『高原』第155号、1963年4月、16-17頁
荻田省三「友へのたより 図書館の窓より」『甲田の裾』第34巻第9号、1963年9月、9-11頁
清原信隆「図書館雑記」『菊池野』第14巻第3号、1964年6月、19-22頁
山村忻雨「患者図書館」『菊池野』第195巻、1970年5月、9-11頁
今西康子「図書館について」『愛生』第25巻第11号、1971年11/12月、8-11頁
沖縄愛生園『開園三十五年記念誌』1973年11月、158頁
松本 馨「年頭に当りて」『多磨』第660号、1977年1月、8-9頁
松本 馨「療養通信」『小さき声』No.173、1977年1月20日、183-184頁
大竹 章「写真風土記(64)」『多磨』第664号、1977年5月、表紙裏
大竹 章「写真風土記(78)」『多磨』第680号、1978年9月、表紙裏
野崎一幸「点字図書室に務めて」『高原』第340号、1979年1月、21-23頁
原田嘉悦「図書館」『望郷の丘 多磨盲人会創立20周年記念誌』1979年5月、72-75頁
多磨全生園患者自治会『俱会一処』一光社、1979年8月
橋田芳明「図書室の一日」『青松』第37巻第1号、1980年1月、15-17頁
長島愛生園入所者自治会『隔離の里程 長島愛生園入園者五十年史』1982年3月、264-267頁
豊田一夫「栗下信策(上)」『愛生』第36巻第7号、1982年8月、8-12頁
菊池 佑・菅原 勲編『患者と図書館』明窓社、1983年
「ハンセン病図書館運営内規」1983年9月
大竹 章「写真風土記(134)図書館別館」『多磨』第741号、1983年10月、表紙裏
奄美和光園『創立40周年記念誌』1983年12月、82頁
「〈患者作業場めぐり〉 ⑤図書部」『高原』第440号、1987年7月、表紙裏
鷹志 順「図書室寸描」『菊池野』第403号、1988年6月、8-9頁
「多磨全生園ハンセン病図書館を訪ねる」『Monthly 新刊情報 October 1988』Vol.2. No.10、282-285頁
国立療養所沖縄愛生園入園者自治会『命ひたすら 療養50年史』1989年11月、405-406頁
上野八重子「図書室雑感」『始良野』第236号、1990年4月、13-15頁
松本 馨「文書伝道と自治会活動(10)(11)」『小さき声』〔第二期〕No.23、1990年4月15日、4-6頁
大谷藤郎「資料の保管等について」1990年9月28日 藤発第44号文書
「自治会日誌」『多磨』第71巻第11号、1990年11月、裏表紙
室伏修司「〈図書館の秘儀〉—多磨全生園ハンセン病図書館を訪ねて」親和女子大学付属図書館報『一つ嶽山』
No.14、1991年3月。『解放新報』1991年5月10日号に転載
大竹 章「資料展示室」『多磨』第831号、1991年4月、表紙裏
山下道輔「ハンセン病資料調査会における報告—ハ病図書館・収集・保存・展示の現状」『多磨』第845号、
1992年6月、18-24頁
松本 信『生まれたのは何のために—ハンセン病患者の手記』教文館、1993年2月
「〈座談会〉資料館オープンまで(1)(5)」(抄録)『多磨』第861-865号、1993年10月、1994年2月
小杉敬吉「追懐の記(1)原田嘉悦さんのこと」『多磨』第891号、1996年4月、30-34頁
「愛生『図書室』が建ちました」『愛生』第37巻第1号、1996年4月、16-17頁
瓜谷修治『ヒイラギの檻—20世紀を狂奔した国家と市民の墓標』三五館、1998年7月
「ハンセン病図書館運営規定」1999年6月18日改訂
「長島愛生園『神谷書庫』収蔵図書一覧」『愛生』第54号第11/12号、2000年11月、200-211頁
山下道輔「ズームアップ—ハンセン病図書館」『多磨』第958号、2001年11月、48頁
菊池 佑『病院患者図書館—患者・市民に教育・文化・医療情報を提供』出版ニュース社、2001年
愛生園入所者自治会「ハンセン病資料館建設に関する要望書」岡山県知事・邑久町長宛て、『愛生』第56巻
第7号、2002年8月、1-8頁
双見美智子「物と心の証し整えて」『愛生』第56巻第7号、2002年8月、9-10頁

『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』2005 年 3 月

瓜谷修治「多磨全生園のハンセン病図書館の廃止と保管資料のハンセン病資料館移管について」ハンセン病

回復者とともに歩む関西連絡会「支援する会ニュース」第 25 号、2006 年 1 月 12 日

ハンセン病図書館友の会会報『朋』第 1-11 号、2006 年 1, 7-11 月、2007 年 1, 5, 9, 11 月、2008 年 3 月

佐川 修「資料収集の思い出」『藤楓協会創立五十周年記念誌』(藤楓協会、2007 年 6 月) 161-164 頁

山下道輔「開講の挨拶」、ハンセン病図書館友の会・ハンセン病市民学会図書館資料部会編『「将来構想」の

歴史に学ぶ「第二回ハンセン病資料セミナー 2007」報告』皓星社、2007 年 12 月

ハンセン病文庫・朋の会会報『朋』第 12 号、2008 年 7 月

【Abstract】

The Role of the Library in the Lepra-Sanatorium (1)

Takayuki SHIBATA

What meanings does the library in a leprosarium have for patients of Hansen's disease who have had to live their entire lives there due to law, social discrimination, and prejudice? This essay covers the role of the patients' library in institutions of lifelong quarantine, and finds that patients regard the library as a place for mental cultivation and liberation.